The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 夏目漱石『吾輩は猫である』縫田針作の材源 : 小出新次郎の女子裁縫高等学院経営 |
| Author(s) | 合山, 林太郎 |
| Citation | 待兼山論叢. 文学篇. 2012, 46, p. 1-15 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/27238 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 夏目漱石『吾輩は猫である』縫田針作の材源

## ―― 小出新次郎の女子裁縫高等学院経営 ――

合山　林太郎

キーワード：吾輩は猫である、夏目漱石、材源研究

### はじめに

夏目漱石『吾輩は猫である』（以下、『猫』と言う）第九回には、巣鴨の狂人天道公平の書簡が登場する。ある日、天道公平なる人物から、道を説いた書簡を受け取った苦沙弥は、その難解な表現を見て、「中々意味深長だ。何でも余程哲理を研究した人に違ない。天晴な見識だ」と感心し、公平に対し尊崇の念を抱くようになる。しかし、その後、来訪した迷亭から、公平が、現在は巣鴨の瘋癲院に入院している旧友立町老梅であることを知り、人とは何か、狂気とは何かという問題について思いを巡らすようになる。

『猫』のなかでも重要な場面であるが、この公平の書簡に先立ち、二通の書状が、作中に描かれている。一通は、ある華族からの戦勝記念祝賀会への寄付依頼状であり、もう一通は、大日本女子裁縫最高等大学院を経営する縫田針作からの書籍購入の依頼状である。これらの書状はいずれも苦沙弥の関心を引くことはなく、屑篭行きとな

るが、このうち、縫田針作の依頼状には明瞭な材源がある。すなわち、この書状は、当時、女子裁縫高等学院という裁縫のための女学校を経営していた小出新次郎という人物が、実際に発信した依頼状（架蔵）[1]の引き写しなのである。[2]

『猫』の材源については、英語教科書の英文の邦訳が「巨人引力」と題して掲載されていること（第二回）[3]や、イギリスの学術雑誌『フィロソフィカル・マガジン』中の論文が、「首縊りの力学」の挿話（第三回）に利用されていることなど[4]多くの指摘がなされているが、この依頼状については論じられていない。[5]

本稿では、『猫』中に取り入れられた小出新次郎の依頼状、及び小出が依頼状を発信するに到る経緯を紹介するとともに、その作中への取り込みをどのように評価し得るかについて論じる。

## 一　縫田針作と小出新次郎の書籍購入依頼状

まず、『猫』中の縫田の依頼状と、小出のそれとを較べることから始めたい。まず、『猫』中に記された縫田針作の書籍購入依頼状を掲げる。

時下秋冷の候に候処貴家益々御隆盛の段奉賀上候陳れば本校儀も御承知の通り一昨々年以来二三野心家の為めに妨げられ一時其極に達し候得共是れ皆不肖針作が足らざる所に起因すと存じ深く自ら警むる所あり臥薪嘗胆其の苦辛の結果漸く茲に独力以て我が理想に適するだけの校舎新築費を得るの途を講じ候其は別義にも御座なく別冊裁縫秘術綱要と命名せる書冊出版の義に御座候本書は不肖針作が多年苦心研究せる工芸上の原理原則に

法とり真に肉を裂き血を絞るの思を為して著述せるものに御座候因つて本書を普く一般の家庭へ製本実費に些少の利潤を附して御購求を願ひ一面斯道発達の一助となすと同時に又一面には僅少の利潤を蓄積して校舎建築費に当つる心算に御座候依つては近頃何共恐縮の至りに存じ候へども本校建築費中へ御寄附被成下と御思召し茲に呈供仕候秘術綱要一部を御購求の上御侍女の方へなりとも御分与被成下候て御賛同の意を御表章被成下度伏して懇願仕候匆々敬具

大日本女子裁縫最高等大学院
校長　縫田針作　九拝

引用は、初出『ホトトギス』九巻六号（明治三九年〈一九〇六〉三月）による。単行本『吾輩は猫である』においては、若干の異同がある。(6)

これに対し、小出新次郎の依頼状の文章は次のとおりである。ここでは、書状の本旨の部分のみを掲出する。

謹捧一書候愈御健康に被為渉御隆盛之段奉賀上候陳れば本校儀も御承知之通り一昨々年以来二三野心家の為めに妨げられ一時其の極に達し候得共是れ皆不肖新次が足らざる処に起因すと存じ深く自ら警むる処あり臥薪嘗胆其の苦辛の結果漸く茲に独力以て我が理想に適するだけの校舎新築費を得るの途を講じ候其は別義にも御座なく別冊裁縫秘術綱要と命名せる書冊出版の儀に御座候本書は不肖新次が多年苦心研究せる工芸上の原理原則に法とり真に肉を裂き血を絞るの思ひを為して著述せるものに御座候因て本書を普く一般の家庭へ製本実費に

些少の利潤を附して御購求を願ひ一面斯道発達の一助となすと同時に亦一面には僅少之利潤を蓄積して校舎建築費に当つる心算に御座候依ては近頃何共恐縮之至りに存じ候へども本校建築費中に御寄附被成下と御思召し茲に呈供仕候秘術綱要　部を御購求の上御侍女の方へなりとも御分与被成下候て御賛同之意を御表章被成下度伏して懇願仕候匆々敬具

明治三十　年　月　日

東京女子裁縫高等学院
校長　小出　新次郎　九拝

令夫人殿

両方の書状はともに、自身の書『裁縫秘術綱要』を、やや高額な値段で依頼状の送付先の家庭に購入してもらい、その代金の一部を、新校舎建築の資金に充てたいという内容である。

小出の書状と『猫』との間には、小さな差異はある（縫田、小出両書状の傍線を付した箇所）。たとえば、冒頭「謹捧一書候　愈御健康に被為渉」が「時下秋冷の候に候処」へと変化し、「不肖新次」が「不肖針作」に置き換えられている。また、縫田の書状では、小出の書状にあった発信日付や宛名が省略され、『裁縫秘術綱要』の購入部数に関する箇所の空白部分が埋められ、「秘術綱要一部」と記されたほか、一部の助辞や漢字が改められている。とくに、小出の高等学院は、縫田の書状では、「大日本女子裁縫最高等大学院」と誇張を伴った名称に変化しているのは意図的なものであろう。しかし、その内容や文章は、『裁縫秘術綱要』などの固有名詞も含め、ほぼ同一で

ある。

『猫』では、縫田の書状について「主人〔筆者注　苦沙弥のこと〕は第二信を取り上げたが「ヤ、これも活版だ」と云った」と記されているが、小出の依頼状も活版で印刷されている。また、小出の書状に言及される『裁縫秘術綱要』に関しては、明治三八年九月一五日に第一版が刊行されていたこと、すなわち、『猫』のこの回の執筆時期（明治三八年一一月以降）よりも前に出版されていたことが確認できる。漱石が小出の書状を参照しながら、縫田針作の書状を執筆したことは確実と言えよう。

なお、小出の書籍購入を依頼する文章は、掲出箇所に続き、「追伸」として、卒業生が小出の代理として各戸を訪問するので、あらかじめ代金を用意しておいてほしい旨が記され、また、「予定建築校舎図案并に坪数表」と題して、建築予定の講堂、遊技場、寄宿舎の見取り図が描かれているが（後掲図版参照）、これらは『猫』には取り入れられていない。

## 二　小出新次郎の女子裁縫高等学院経営
### ――女子東京美術学校、帝国教育会との関わりを中心に――

縫田針作の書籍購入依頼状の箇所は、実際に発信された小出新次郎の依頼状を写したものであった。それでは、小出の依頼状は、どのような経緯で発信されたものであろうか。

実は、この依頼状の作成は、小出の女子裁縫高等学院[7]（以下、高等学院と言う。）経営をめぐる騒動が発端となっており、当時のジャーナリズムを賑わせてもいる。以下、この点について略述する。

事の顛末は、小出が、高等学院休校の際に行った演説を速記した『告別の辞』（明治三六年〈一九〇三〉刊、国立国会図書館蔵）という冊子、及び、『万朝報』が、明治三六年一月二六日より二月二日まで連載した「女子東京美術学校の大破談」という記事に詳しい。(8)

明治一九年に大阪において、裁縫技術の講習を業としていた小出は、その後、地方を転々としながらも活動を継続し、明治二九年〈一八九六〉頃、裁縫専科教員養成所を設立した。同校は浮沈を経ながらも、多くの生徒を集め、明治三五年〈一九〇二〉頃からは、東京千代田区一橋通りの帝国教育会の講堂を借りて講習を行うようになる。

ただ、この時期、小出は多額の負債を抱えてもいた。自らの教育法のさらなる普及を目指して出版した講義録の販売がうまくいかなかったためである。この講義録は予約出版のかたちで刊行されたが、附録の教材に不備が相次ぎ、多くの会員が中途で購入を中止した。一方、教材は事前に制作されていたため、小出は、販売の見込みのない書籍のために大量の資金をつぎ込むこととなったのである。

ここで、別の女子学校に関する事情が、高等学院の経営に関係しはじめる。明治三五年四月、教育学者の湯本武比古を校長に擁して設立された女子東京美術学校は、華々しい宣伝にもかかわらず、生徒を十分に集めることができず、同年秋頃には、負債のため、校内に紛糾を生じ、湯本は校長の職を辞し、設立当初の経営陣も学校を離れた。(9)

この窮状を打開するために、蔵原惟郎が女子東京美術学校の校長に就任するが、その際、帝国教育会会計主任大橋次郎と編輯主任である千田時次郎が、新たに経営に参加した。そして、経緯の詳細は明らかではないが、この二人は、小出の高等学院を女子東京美術学校に吸収することによって同校の経営の再建を図るようになる。すなわ

ち、小出のもとに集った生徒を、自身らの学校に取り込むことを画策した。

このような意図のもと、大橋が講堂使用料滞納を責めることによって小出に対して圧力をかけ、一方で、千田が、自ら高等学院の幹事となり、教員や生徒を懐柔しつつ、債務返済のため、実質的な経営権を千田自身に譲渡するよう、小出に要求するようになった。

しかし、小出は決して経営権を渡そうとはせず、両者の対立は激しさを増すようになり、明治三六年一月九日に挙行された始業式においては、千田が小出を殴打し、激昂した小出が昏倒するといった事態にまで発展している。

もっとも、この頃から、この事態を新聞が報道するようになる。小出の説明によれば、「全市の新聞が本校に同情を寄せて呉れ」（前掲『告別の辞』二〇頁）た、すなわち、小出に対して好意的な報道が多かったという。事実、先述の『万朝報』の連載記事は、千田や大橋らを「奸物」（明治三六年一月三〇日）、「迫害」（同二月二日）などといった言葉で形容する一方、小出に関しては「斯る打撃を被りながら少しも屈せず熱心に運動したる」などと好意的に描いている。[10] こうしたこともあってか、三七年の春から夏にかけては、高等学院経営をめぐる混乱は沈静化したようである。

しかし、小康はながくは続かず、同年九月には、帝国教育会より、帝国教育会講堂の使用を同月末で禁止する旨の通達が出される。滞納していた講堂使用料が教育会の指示どおりに支払われなかったことが使用停止の理由であるが、小出は、これを同校に対する千田らの嫌がらせと見ている。

小出は、高等学院の経営を守るため金策をしつつ、千田、大橋らがなお帝国教育会内の要職に就いていることを問題視し、教育界の現状を打破すべく運動を始めることとなる。具体的には、当時、審議されていた帝国教育会の

約款改定に反対している。従来、帝国教育会の約款では、理事は、半数が会長の指名、半数が会員の選挙によって選出されていた。これをすべて会長指名に変更しようとしていた点を、小出は問題視し、同志を集め、総会で改正を否決しようとしたのである。(11)

だが、この挙も結果的には小出に不利に働き、小出は、総会の前日一二月五日に帝国教育会を除名される。翌日、総会会場に駆けつけた小出は、警備員に阻止され、議場へ入ることができなかった。当然、高等学院の講堂使用も不可能となり、教場を失った同校は、数日後、休校を宣言し、小出は、学生の前で涙ながらに事の一部始終を語ることとなったのである。

小出の依頼状に話を戻そう。この依頼状は、こうした事件を経た後、小出が今日のダイレクト・メールのように、東京市内の人々に発信したものであったと考えられる。「明治三十」と「年」との間、および、「月」「日」の上に空欄があるが、この部分に手書きで数字を書き入れ、同じ依頼状を何度も発信していたのであろう。

書状中に記された「一昨々年以来二三野心家の為めに妨けられ」や「臥薪嘗胆其の苦辛の結果」は、いずれも単なる修辞ではなく、大橋、千田らに対する小出の抵抗を指している。また、「校舎新築費」は、帝国教育会講堂の使用が禁止されたことにより必要となったのであった。(12)

## 三　書籍購入依頼状取り込みに対する評価

『猫』の材源となった小出の書状には、以上のような背景があった。このことをも踏まえつつ、『猫』の縫田に関する記述をどのように評価し得るか考えてゆく。

まず、漱石が小出の事跡についてどの程度知っていたか、また、どのような経緯を経て、この依頼状が小説中に取り込まれたかについては、なお不明と言わざるをえない。

小出の依頼状にまつわる逸事が、『猫』第九章を構成する主な要素の一つとして予定されていたことは、漱石の創作ノートでもあった『手帳（四）』（東北大学漱石文庫所蔵）に、「日本堤分署」や「猫の読心術」などの他の第九章に書かれた事柄と並んで、『裁縫秘術要綱』の名が挙がっていることからも明らかである。[13] すなわち、この箇所が、一定の考慮を経た後に書かれたことは明らかであるが、それ以上のことは分からない。

ただ、『猫』における縫田針作の扱いは、きわめて軽い。縫田の依頼状に関する記述は、「主人はこの鄭重なる書面を、冷淡に丸めてぽんと屑籠の中へ抛り込んだ。せっかくの針作君の九拝も臥薪嘗胆も何の役にも立たなかったのは気の毒である」という数行の文章とともに終了し、話題は、天道公平の書簡へと移ってゆく。

加えて、縫田の描かれ方には戯画化の気味がある。先に触れた「大日本女子裁縫最縫高等大学院」などの誇張を含んだ表現から、そうした傾向がうかがえる。

このような点を考えると、縫田の依頼状のくだりに、主要な話題の前に置かれた一挿話として、以上の意味を読み込むことは難しいように思われる。また、小出の依頼状は、それが発信された経緯などが顧みられることなく、その文章の激烈さのみが、滑稽味を醸し出すための装置として『猫』に取り込まれたと想像される。別の言い方をするならば、小出の社会活動が持っていた複雑さは、『猫』の小説世界から排除されているのである。[14]

その上で、こうした現実の依頼状の文面をそのまま作中に取り込むという手法については、『ホトトギス』の写生文と関連させて考える必要があることを指摘したい。周知の通り、明治三二年〈一八九九〉一一月に子規が会を

開いて以降、高浜虚子や坂本四方太らが中心となって、この種の文章を盛んに制作している。また、『ホトトギス』には募集文欄や募集日記欄が設けられ、多数の写生文の作品が投稿されている。

『ホトトギス』においては、現実の言葉をそのまま作品中に取り入れることが、是とされていた。[15] たとえば、六巻一一号（明治三六年七月）募集文章欄には、「言葉を写生せよ」という課題のもと、地方の方言による会話が内容とする作品六篇が掲載されている。

とくに『猫』における書状取り込みとの関連で言うならば、九巻二号（明治三八年〈一九〇五〉一一月）に掲載された写生文の坂本四方太「転居」が注目される。この文章の冒頭には、「周旋屋の寄越した葉書を一心に眺める」という記載とともに、「小石川区久堅町所在、閑静ニシテ眺望絶佳、瓦葺平家、明治卅五年建築、室数五ツ、借地四十五坪、地代坪五銭ノ割合、門構ニシテ庭アリ／右売価四百円也、大至急〔筆者注　／は改行を示す〕」という、実際の売家・借地案内の葉書と考えられる文面が掲げられている。

捉え方によっては、丸写しともみなし得る縫田の書状のくだりは、こうした写実を重んじる価値観のなかで発想され、また、可能となったと考えるのが妥当であろう。

## おわりに

本稿では、『吾輩は猫である』中に記された縫田針作の書状が、実際に発信された小出新次郎の書籍購入依頼状をほぼそのまま写したものであることを指摘し、また、依頼状発信に至るまでの小出の事跡を明らかにした。縫田針作の依頼状をめぐる箇所からは、『猫』が、現実世界の事象を自在に摂取し成った作品であることが、あらため

て確認できるのである。

（注）

（1）書状は、縦一九・六センチ、横五四・七センチの一枚の洋紙に、文面が印刷されている。なお、本資料は、二〇一〇年五月に開催された第二八回春の古書大即売会（会場　京都市勧業館みやこめっせ）において、一枚刷りや広告の山の中から見つけ、購入した。

（2）縫田針作の依頼状の状況を考えるかぎり、その前に記される、華族の義援金依頼状も、実際に発信されたものを、そのまま写している可能性が高い。

（3）久泉伸世「「吾輩は猫である」の一材源としての「第2読本」」（『専修人文論集』五五号、一九九四年一〇月）。なお、本材源に関する研究の概要を知るにあたって、藤元直樹「死角の巨人／巨人の死角 ――『吾輩は猫である』「巨人、引力」の典拠原文をめぐって ――」（日本比較文学会大会、二〇〇八年六月二一日）発表資料の恩恵を受けた。

（4）「寒月の「首縊りの力学」その他」（『中谷宇吉郎集』第一巻、岩波書店、二〇〇〇年、初出『漱石全集』月報第四号、〈『漱石全集』第一巻、一九三六年二月〉、及び、小山慶太『漱石が見た物理学 ――首縊りの力学から相対性理論まで ――』（中公新書、一九九一年、四二―四六頁）に詳しい。

（5）『漱石全集』（岩波書店、一九九三年）注解（竹盛天雄、安藤文人）及び増補された第二版『漱石全集』（同、二〇〇三年）注解の両方において、小出の依頼状に関する言及はない。

（6）初出『ホトトギス』と単行本『吾輩は猫である』第二冊（大倉書店・服部書店、明治三九年）との異同は一箇所あり、「費中に御寄」（初出）が「費中へ御寄」（単行本）へと変わっている。原稿などとの異同については、『漱石全集』第一巻（前掲、七二二頁）を参照。

（7）小出の書状では、校名に「東京」が冠されていたが、明治期の報道では女子裁縫高等学院という名称が多く用いられているので、本稿においてもそちらを採用する。

（8）これらの文章は、いずれも小出の側の見解を強く反映するものであり、その記述は中立性を欠く嫌いもあるが、事件に

関する記述が詳細であるため用いた。

（9）この女子東京美術学校は、彫刻家の藤田文蔵を校長として設立された女子美術学校とは別のものである。

（10）「同院長小出新次郎は人格上よからぬ事ある上に、講堂使用料をも支払はぬ為め、帝国教育会より立退きを請求せられ、会員の資格をも失ひ、遂に先日の如き茶番を演ずるに至り（下略）」（「女子裁縫高等学院の廃校」『読売新聞』明治三六年一二月一〇日）といった、小出に批判的な報道もある。

（11）小出と大橋、千田との対立に関して、帝国教育会及びその会長である辻新次が、どこまで関係していたかは定かではない。小出は、明治三七年（一九〇四）一月に、辻新次宛に、今後、大橋、千田が高等学院の運営を妨害しない旨を記した五箇条の誓約書を出したものの、それが十分守られていないと述べている（前掲『告別の辞』五頁）。『万朝報』は、「帝国教育会の事務員として行動隠（ママ）かならずとて辻会長理事評議員等の怒に触れて免職されんとし」（明治三六年二月二日）などと、辻と大橋、千田らとの間に距離があるかのような書きぶりである。

（12）小出新次郎は、この後、自らの裁縫に関する知識をまとめた『和洋裁縫大全』（明治四一年、全三〇冊）を刊行するが、その広告には、女子裁縫高等学院出版部の所在地が「東京市青山原宿二〇九番地」と記されている（『読売新聞』明治四一年二月一七日）。同校は、明治四四年には、豊多摩郡千駄ヶ谷字穏田一一四番地に、寄宿舎が附属したかたちで建設されていることが確認できるが、同一二月一二日、裁縫室からの出火により、全焼している（「青山穏田の火事」『読売新聞』明治四四年一二月一三日）。

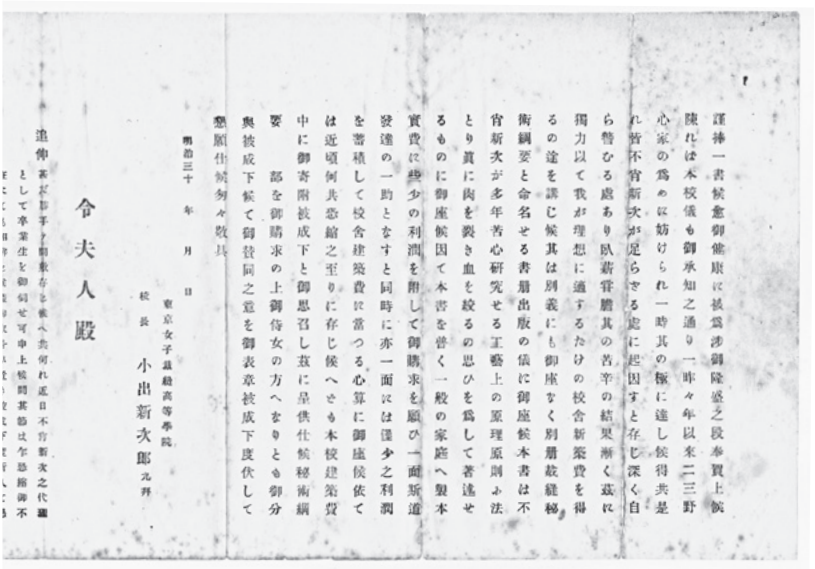
（13）東北大学附属図書館漱石文庫所蔵『手帳3（俳諧手帳）』中の断片三三。『漱石全集』一九巻（岩波書店、一九九五年）二二六頁。

（14）読者の側から考えた場合、『猫』中の縫田の書状から小出新次郎を想起することは、明治三九年当時においてはそれほど難しくなかったと思われる。高等学院の休校は、『猫』の当該回が発表される二、三年ほど前の出来事であるが、それ以降も小出に関する報道はなされており、また、東京市下には、『猫』に取り入れられたものと同様の小出の書籍購入依頼状を受け取った人々も多くいたと考えられるからである。

（15）『ホトトギス』の写生文が、事実に固執する傾向を持っていたことが、相馬庸郎によって指摘されている（「もう一つの

リアリズムー『ホトトギス』募集日記の持つ可能性――」『文学』四一号、一九七三年一〇月）。

（文学研究科講師）



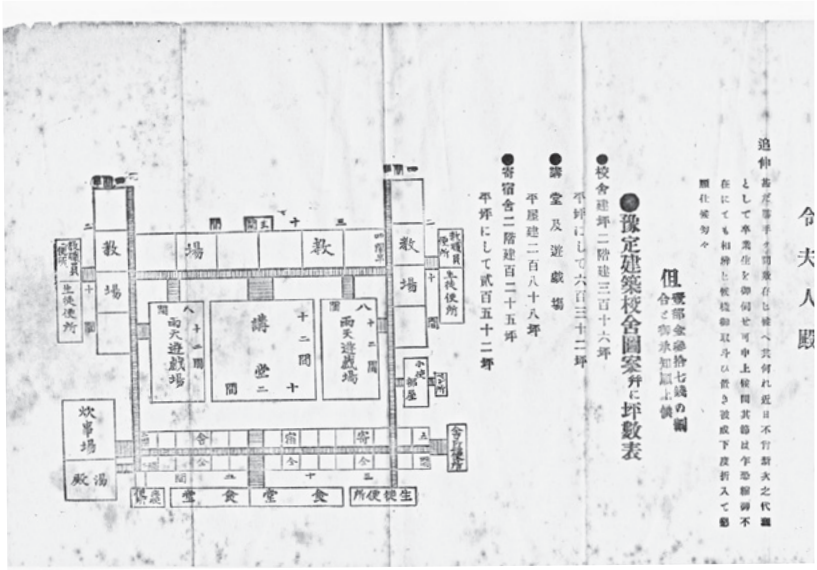
謹啓一書候愈御健康に被爲渉御隆盛之段奉賀上候
陳れば本校儀も御承知之通り一昨年以來二三野
心家の爲めに妨げられ一時其の極に達し候得共是
れ皆不官新次が足らざる處に起因すと存じ深く自
ら責むる處あり臥薪嘗膽其の苦辛の結果漸く茲に
獨力以て我が理想に通ずるだけの校舎新築費を得
るの途を講じ候其は別義にも御座なく別冊裁縫秘
術綱要と命名せる書籍出版の儀に御座候本書は不
官新次が多年苦心研究せる工藝上の原理原則ゐ法
とり眞に肉を裂き血を絞るの思ひを爲して著述せ
るものに御座候因て本書を普く一般の家庭へ製本
實費に些少の利潤を附して御購求を願ひ一面斯道
發達の一助となすと同時に亦一面には僅少之利潤
を蓄積して校舎建築費に當つる心算に御座候依て
は近頃何共恐縮之至りに存じ候へども本校建築費
中に御寄附被成下と御思召し其に呈供仕候秘術綱
要　部を御購求の上御侍女の方へおすとも御分
與被成下候て御賛同之意を御表章被成下度伏して
願仕候匆々敬具

明治三十　年　月　日

東京女子高等師範學校
校長　小出新次郎　九拜

合夫人殿

追伸　若し御手之間無存ら被へ共何れ近日不官新次之代識
として卒業生を御伺せ可申上候間其節は乍恐御不
在にても相勝と被成御取斗ひ被き度成下度折入て願
仕候匆々



合夫人殿

追伸　若し御手之間無存ら被へ共何れ近日不官新次之代識
として卒業生を御伺せ可申上候間其節は乍恐御不
在にても相勝と被成御取斗ひ被き度成下度折入て願
仕候匆々

但　優部金壱拾七錢の調
合と御承知願上候

●豫定建築校舎圖案幷に坪數表

●校舎建坪二階建三百十六坪
平坪にして六百三十二坪

●講堂及遊戯場
平屋建二百八十八坪

●寄宿舎二階建百二十五坪
平坪にして弐百五十二坪

教場　教場　教場　教場　講堂　十二間　十二間　西矢遊戯場　西矢遊戯場　八十二間　八十一間　教員便所　生徒便所　教員便所　生徒便所　小使部屋　寄宿舎　炊事場　湯殿　食堂　食堂　生徒便所　教員便所

（小出新次郎書籍購入依頼状写真）※判型の都合上、一枚の書状を二画像に分割した。

## SUMMARY

### The Source of the Letter Depicted in Soseki's *Wagahai ha Neko Dearu*

Rintaro GOYAMA

This paper attempts to argue that the letter from Shinsaku Nuita, which is depicted in Chapter Nine of Soseki Natsume's *Wagahai ha Neko Dearu (I am a Cat)* is in fact, copy of Shinjiro Koide's letter. Koide was a needlecraft teacher and had been managing a sewing school called " Joshi Saiho Koto Gakuin" in the latter half of the Meiji period. The letter copied in *Wagahai ha Neko Dearu* was one of the invitation letters sent to the general public inviting them to purchase his book. This finding adds new information to the annotation of Soseki's one of the prominent works. The relationship between copying and the interest on literary sketch (*Shasei*) of that time is also discussed in this paper.

追記

本論文の発表後、藤井享子氏に「『吾輩は猫である』における縫田針作」（『服飾美学』二五号、一九九六年六月）というご論考があることに気がつきました。先行研究の調査に遺漏がありましたことを、お詫び申し上げます。

詳細については、『待兼山論叢・文学篇』四七号（二〇一三年一二月）に掲載されております「前号「夏目漱石『吾輩は猫である』縫田針作の材源—小出新次郎の女子裁縫高等学院経営—」についての訂正」をご覧ください。

合山林太郎